大人が次の世代を担う子供たちに残せるものを、十年のスパンで考えたい。

新しい100年のはじまり。

市長　新年おめでとうございます。

全員　おめでとうございます。

市長　21世紀は、変化の激しい、見通しの難しい時代になりそうですが、逆にいろいろな可能性を秘めているとも言えます。留萌にとっても希望に満ちた百年にしたいと思います。

まず、みなさんのこれまでの活動を振り返っていかがですか。

越前　昨年秋に「女性ネットワークるる」（以下、るる）が発足しました。もともとは、平成10年からの留萌女性懇話会の活動がきっかけです。

これには、女性のネットワーク作りをしようということと、よりよい社会のために女性も勉強して、積極的に関わり、提言していこうという2つのテーマがありました。

この2年を経て、ネットワーク化では「るる」、社会参加では、新しく女性懇話会「ウィシュ」（以下、ウィシュ）につながりました。

懇話会では、昨年、高齢社会への提言を女性の視点からまとめましたが、それが実現していけばと思っています。

松本　青年会議所（以下、JC）は、よりよい留萌のために、まず自分たちで動こうというのが基本です。

これまで21世紀は「未来」の代名詞でしたが、現実となった今、もっと遠くをみつめる必要があります。

将来、地域を支えるのは子供たちです。大人が次の世代を担う子供たちに残せるものを、10年のスパンで考えたいですね。

もうひとつは、昨年発足した「るもい演劇文化振興会議」（ゲキシン）。

劇団現代座の公演を留萌でやろうということで、年齢、職業、性別を問わず、濃い顔ぶれがそろい、面白いネットワークが出来たんです。公演が終わっても「解散するのは惜しいので、続けよう」ということになりました。

今年は、誰かの活動を支援する「守り」以外に、創作やワークショップ、他団体とのネットワーク化など「攻め」の活動も考えたいですね。

越後谷　わたしの会社は運送業で、現在市内で唯一フェリーを使って本州へ留萌の産物を運んでいます。

留萌からフェリーが出れば、これまで苫小牧、小樽に走っていたトラックをここから乗せられる。労務管理もしやすいし、陸上運賃が安くなれば、それは地元の荷主や消費者への還元にも結びつく。

「ここから出れば儲かるゾ」というのが、そもそも留萌港へのフェリー就航に関心を持った動機です。

留萌港からフェリーが出て、新しい仕事や物流基地もできれば、留萌ばかりか道北圏のためにもなる。留萌港フェリー研究会で勉強して、現状では見えない未来像が見えてきました。

厳しい経済状況の中で、現状を変える必要もあります。東京一極集中。北海道では苫小牧や小樽の港の間に札幌があって、人も物もどんどん札幌に集まっていきますが、その周辺は弱っていく。それでいいのかな。札幌経由じゃなく、ストレートに留萌発、旭川発という状況を作りたいですね。

佐藤　萌州地域振興研究会（以下、萌州）は、異業種のまちづくりチームで、牛フンの堆肥化や東京の大学教授との勉強会を行っています。だれでも出入り自由の、いわば図書館みたいなもので、僕自身は自分が磨かれれば、まちもよくなると思っています。

萌志会は若手の建設業者の集まりで、全道11地区にあり、今年留萌で全道大会があります。留萌らしいイベントにしたくて、7月の「海の記念日」のころに、観光船「ふじ丸」をよんで、クルーズをしたいと思っています。

札幌など志向が内陸向きになりつつあるので、なんとか海、港にみんなの関心を向かせたいと思っています。

新しい産業ができて、安心して戻れる環境ができればと思います。

楽しくなければ始まらない！

市長　みなさんのような市民が活動すると留萌全体のエネルギーが増えていきます。ここ数年「萌っこ春待里」やお土産作りなど女性のエネルギーが感じられますが、これからの可能性はどうでしょう。

松本　地場にいる人が「磁場」になればいいんですよ。外からの力に頼るのではなく、ここにいる人が磁場になって磁力を発揮して、外の人を引き寄せなきゃいけないですね。

越後谷　「楽しいこと」がだいじです。例えば、今日ここで、みなさんが、同じ意識レベルで、楽しく話をしていたとしても、そうじゃない人には「何やってんだ!?」。地域振興なんて言っても「それって何が楽しいの？」となってしまう。やってて楽しくないと入ってこられないよね。

音楽の好みでも、僕は見かけが「演歌顔」ですが、実はジャズが好きで、話してみると「えー、お前もか」なんて意気投合することもありました。

「留萌なんて」という人もいるけど、仲間ができてくると「留萌もなかなかいいゾ」となります。分散している人や組織を楽しく結びつけることだね。

松本　ゲキシンの活動もそうなりたいですね。昨年、富良野で、演劇工房というNPOが立ち上がり、すでにまちの中心になってしまった。

行政がハードを用意して、ソフトは我々が動いて、「面白いことみんなでやろうよ」と広げていくこと。

越後谷　大人が楽しければ子供も絶対楽しいはず。例えば、親がウキウキとコンサートに行くのを見た子供が「そんなに楽しいなら連れてって」となる。そういうことを次の世代に広めたい。「留萌ってこんなところだよ」という気持ちを、子供のころに植え付けたい。ただ、地元の学校を卒業したからという意識だけでは、寂しいよ。

越前　もどって来たいという人はけっこういます。都会で仕事をして、生活していくのは大変みたいです。でも、生活を考えると仕事がネックになって「帰りたいけど戻れない」となってしまう。新しい産業ができて、安心して戻れる環境ができればと思います。

「海があって、山があって、留萌はいいよね」って。でも、ずっとここで暮らしている人には、あたりまえの風景なので、外に出て初めてその良さに気づくのかもしれませんね。

みんなが結び目の時代。

市長　苦しいこともあるかもしれないけれども、その中で目標をたてて、楽しくやっていくことが大切ですね。

さて、21世紀の我が国は人口減少社会と言われています。これまで地域の発展は人口の増加がめやすでしたが、もうそういう尺度では計れなくなってきています。数よりも住んでいる人の満足度が大切になる時代です。

そういう時代に、IT（インフォメーション・テクノロジー＝情報技術）によって市民と市役所、または市民同士を結びつけて語り合うことが可能になります。みんなで話し合い、満足度を高めていく。そういう可能性についてはいかがですか。

佐藤　萌州ではホームページを開き、電子メールで意見交換をする「掲示板」も開設しています。この1年で2万件のアクセスがありますし、英語版も作って、世界に留萌の情報を発信しています。

インターネットは、これまでマス・メディアにしかできなかったものが、個人のレベルでできるという新しい情報伝達の手段になりました。最終的には、使う人の問題ですから、IT教育以前の、使う人間の教育がだいじになってくるでしょう。

市長　情報伝達の手段が、個人と個人を